掲載日：2021年03月17日，面名：教育，記事ID:KIJ20210317_A0025000100Q37001
(C)沖縄タイムス社

理論と実践 個を伸ばす

第58回沖縄タイムス教育賞

第58回沖縄タイムス教育賞に、学校現場や地域で優れた研究、実践活動を続ける２人が選ばれた。受賞者の活動と抱負を紹介する。那覇市のタイムスホールで22日に開かれる贈呈式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加人数を制限して招待者のみとし、祝賀会は取りやめる。

地域の福祉人材 育成

学校教育部門



福祉教育への思いを語る崎浜秀治さん＝8日、那覇市・真和志高

福祉の根本は「人を大切にすること」。高齢化が進んでいる日本や沖縄で、家庭科と同じようにどの学年も福祉を学ぶ必要があると感じている。

福祉教育に携わり18年。県内外の介護現場で人手不足になっているが、仕事のイメージ悪化などで「多くの人は介護福祉士養成校の入り口で止まっている」と懸念する。県内唯一の介護福祉士の受験資格を得られる真和志高校で生徒をサポートし、地域の福祉人材の育成に力を入れている。

さきはま・しゅうじ　1969年、本部町生まれ。高校卒業後、りゅうせき入社。働きながら沖縄福祉保育専門学校や沖縄大学（夜間）に通い、医療法人おもと会に転職。約６年間の勤務を経て2003年から県立高校教諭。13年に琉球大学大学院修士課程を修了。

崎浜秀治さん（51） 真和志高校みらい福祉科教諭

原点は「おばあちゃんが好きで、福祉関係を目指していた」。子どもの頃、祖母が体調を崩した日にみそ汁を作ってあげたことを今も覚えている。福祉教育で最も大切にしているのは「優しさと思いやり。相手の立場に立って考えること」。

真和志高のみらい福祉科は毎年約30人が入学し、介護福祉士の資格取得者は約６～７割。多くの卒業生は県内の介護・看護現場で働いている。

沖縄も高齢化が進み、「離島も含めて地域の学校で福祉を学び、卒業後に地域で働くのが理想のモデル」と提案する。これからは小中学生にも福祉の面白さや魅力を伝えたいという。「介護人材を大切にする社会を目指し、行政と一緒に取り組んでいきたい」と意気込んでいる。

子の力 引き出す演劇

学校教育部門



「演劇の裾野を広げたい」と話す又吉弦貴さん＝10日、那覇市・安岡中

「子どもたちに演劇の楽しさを味わってほしい」。その一心で、演技指導を続けて28年になる。体育教師として教壇に立ちながらも演劇に携わる。赴任した学校では、演劇同好会をつくり、演劇の魅力を伝えてきた。大学卒業後に役者を志したこともあるといい「人を楽しませるのが大好き」と笑う。

2012年の本土復帰40周年事業で脚本、演出を手掛けた「フェンスに吹く風」は、中学生の目から見た米軍基地について考える作品だ。13年から那覇地区中学校総合文化祭では毎年、演劇部門で原作、脚本、演出を務める。演劇の他に福祉施設で読み聞かせもしている。

演劇は、誰もが持つ固有の魅力を引き出せる。子どもたちにも自分の魅力に気付いてほしいとの思いで、活動を続ける。

これまで子どもたちが自由に意見を言い合える舞台づくりを心掛けてきた。自分で考えてアドリブを加えたり、本番でせりふを忘れた子を周りでカバーしたりするなど自主的に動く姿に「自分の殻を破ってくれることがうれしい」。子どもたちの成長が一番のやりがいだ。

沖縄では、演劇の認知度が低いと感じる。「学校教育の現場から演劇の裾野をもっと広げたい」。これからも教壇に立つ傍らで演技指導を続け、演劇の普及や人材育成に力を入れる。

またよし・つるき　1963年、浦添市生まれ。大阪体育大学卒業。91年に那覇市立仲井真中学校で採用。首里中、神森中などで勤務。2018年から安岡中で体育教諭を務めている。

又吉弦貴さん（57） 那覇市立安岡中学校教諭

長年の取り組み 各界が評価

講評

選考委員長・比嘉敏幸

本年度は昨年度と同数の12件の応募があり、学校教育部門で２人が「沖縄タイムス教育賞」に選ばれた。いずれも長年にわたる取り組みが、子どもたちの成長や地域・父母との連携に結びつき、その効果が明確に表現されていた。受賞者には心から敬意を表したい。

真和志高校みらい福祉科教諭の崎浜秀治氏は、県内高校の福祉学科における中心的存在として尽力してきた功績が高く評価された。実践内容も、生徒の活動の自主性や専門性が発揮されており、理論と実践に裏打ちされた活動が資料からも十分感じられた。子どもたちを育てる実践家としての熱意も伝わった。

那覇市立安岡中学校教諭の又吉弦貴氏は、演劇指導で子どもたちの持つ個性を発揮させ、個を伸ばしている様子が十分に読み取れた。琉球、沖縄を題材にした演劇活動によって沖縄のアイデンティティーを確立することは、子どもたちの育成に非常に重要だと感じる内容であった。

一方、資料が十分に準備されていない個人・団体が目立ち受賞者数も過去最少にとどまった。活動実態が見えにくい応募もあった。

タイムス教育賞はあくまで選考資料から評価するというのが基本である。素晴らしい実践であろうと推測されるが、「実績を裏付ける資料がきちんと提出されておらず、審査はできない」と指摘されるケースも多数あった。

その意味で選考資料をどう作るかも評価の大きな分かれ目になる。子どもたちがどう変化し、成長したか。そういった教育指導の「秘訣（ひけつ）」のような部分が見えると評価は高い。推薦者の皆さまには、功績を列挙するのではなく、きちんと第三者が客観的に評価しえるような資料や独自性を強調する内容を簡潔にまとめ、改めて応募をしていただきたい。

（沖縄タイムス社取締役読者局長）